

# 日展ニュース

No. 192

<https://www.nitten.or.jp/> 令和8年2月17日発行

編集兼発行人 神戸峰男



## 特集 第118回日展





第118回日展 右から都倉文化庁長官、宮田理事長、逢坂国立新美術館長によるテープカット

## 第一一八回日展を終えて

公益社団法人 日展

理事長 宮田 亮平

ふりかえれば日展は、明治四十年大きな文明開化のもと、日本の文化振興のため、西欧諸国に追いつけ追い越せの気概で国として開催したのが始まりです。

今回、第一一八回日展を国立新美術館でオープンできたことは誠に嬉しく感慨深いことでありました。そして展覧会が途切れることなく今日に至ったことは、諸先輩のお力、それにも増して日展を愛し鑑賞して下さる数多くの方々のおかげと深く感謝する次第でございます。

これに應えるべく、今回展においても出品者一同渾身の作品を制作、展示いたしました。また、皆様の美術との距離を縮め、より身近に感じていただけますよう作品解説会や各種イベントを実施いたしました。ご来場いただきました皆様には心より御礼申し上げます。

東京における展覧会終了後、現在は巡回展で全国を回っております。今後とも何卒ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

二〇二五年  
第一一八回 日展受賞者一覽

大臣賞

日本画 内閣総理大臣賞  
洋画 内閣総理大臣賞  
彫刻 文部科学大臣賞  
工芸美術 文部科学大臣賞  
書 文部科学大臣賞

微風 マイ・ウエイ  
双笛 譜  
生命の泉  
杜甫詩

岸野圭作  
大谷喜男  
堤直美  
村好謙  
伊藤翔

東京都知事賞

日本画 東京都知事賞  
洋画 東京都知事賞  
彫刻 東京都知事賞  
工芸美術 東京都知事賞  
書 東京都知事賞

温室 赤瓦のある島の集落  
いつの日か  
阿蘇煌然  
月待つと

大豊世紀  
平野行雄  
島田見根夫  
高津明美  
野田正行

日展会員賞

日本画 日展会員賞  
洋画 日展会員賞  
彫刻 日展会員賞  
工芸美術 日展会員賞  
書 日展会員賞

蒼列 希望の雫  
記憶の風  
芙蓉の露  
方城臨々

長谷川雅也  
池上わか  
緒方信行  
河合徳夫  
西村東軒

特選

第一科《日本画》  
秋を編む  
夢見の在処  
光のモザイク  
風雅  
使者  
薔薇の咲く者  
みんなで  
リバーサイド  
梅雨入り  
微睡む庭

井上律子  
大竹しおり  
大矢高弓  
島本純江  
福岡正臣  
前田恭子  
松永美紀子  
水野美宏  
吉岡珠恵  
若崎文絵

第二科《洋画》

室内、鏡  
陽光  
redlight  
光射すオリーブ  
愛馬の日  
時の調べ  
静寂の刻  
門出

相本英希  
岡島真希  
亀山裕昭  
北川直枝  
桐生義也  
才村啓男  
永山秀子  
樋口文子  
松井茂樹  
山本大貴

第四科《工芸美術》

曙の光  
春うつつ  
すべての物語の少女たちへ  
揚々

飯島賢治  
石原真理  
市場英太  
井上英基  
阪口浩史  
高橋斗雄  
橋詰里織  
平井恵子  
藤藁光治  
松木光治

第五科《書》

神谷陸代  
園陽菜  
高石麻代  
町野紗恭

雪魚の枯想八剔廓夙アルカイツク・スマイル邱象升詩万葉の四季  
花泣ひ 八重さくら 灯 無礙 敏 池崎永山 秋英津子  
湯蓮西中角田佐大池秋  
澤見田右田邊川崎永山  
光 万佐代 栖峰雨碧  
聰春健 壤鳳章 萩濤子

「第一一八回日展 審査を終えて」



出席者

理事長 宮田亮平

副理事長 事務局長  
神戸峰男

第一科 日本画

審査主任 福田千恵

第二科 洋画

審査主任 小灘一紀

第三科 彫刻

理事審査員 池川直

第四科 工芸美術

審査主任 三田村有純

第五科 書

審査主任 高木聖雨

司会 西田真人

(出版・編集委員会)

司会 それでは定刻になりましたので、座談会を始めたいと思います。司会を担当させていただきます西田真人です。諸先生方には大変お忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。なお三科の能島先生のご都合が悪く池川先生に審査主任代理としてご出席していただいております。

本年より展覧会の開催回数について、明治四〇年の文展から通算して「第一一八回日展」と、長い伝統を再認識させるような表記となりました。このタイミングで日展ニュースの読者には改めて厳正な審査状況が伝わりますよう、諸先生方には忌憚のないお話を賜りたく存じます。それでは早速になります。宮田理事長よりご挨拶を兼ねて、お気づきのことがございましたらお願いいたします。

宮田理事長 皆様お忙しいところ、ありがとうございます。

この間、西田先生とお話ししましたが、リラックスして語り合いました。

毎回この座談会には、審査主任の先生方にご足労願っているわけでございます。昨日は授賞式、非常に感動深い素晴らしい、次の時代を担ってくださる先生方が、続々と誕生することは素晴らしい



宮田 亮平

ことだと感じました。特選の授与を四十六回やるのは結構きついですね。(笑)

福田 先生は、握手もしてくださいました。握手していただくというのはすごく嬉しく、思い出になると思います。

宮田理事長 作品とお顔があつた場面で一致するんですね。あれがね、素晴らしい役得でございます。開会式の時にはモーツアルトの夢の話を見せていただきましたけれど、授賞式では書の高木先生がいらっしゃるので大変恥ずかしいことですが、美しいという字をもじってお話をさせていただきます。今日先生方もお得意の分野の中から感想も含めて、お話ししていただけたらという気がしております。大変楽しい、そして厳しい部分と両方を持った座談会になつ

てもらえたら、ありがたいと思っておりますので、よろしくお願ひ申し上げます。

司会 宮田理事長、ありがとうございます。続きまして、神戸副理事長・事務局長より、搬入から審査終了までの状況を、お話しただけだとは思いますが。

神戸事務局長 昨日の授賞式は本当に、宮田先生、大変だなと思つて見ておりました。賞をもらう方は、一生に数度しかない、ひよつとしたら一度しかないことを先生にしていただける、私の時はそういうことはなかったような気がしません。受賞者があのような感動を



都倉俊一文化庁長官来館

受けるというのは、とても大きな記憶になってくるのではないかと思います。

搬入から審査終了までということでは、改めて数字を確かめさせていただきましたら、書の応募者が大幅に増えて、それに対して洋画、工芸がわずかに減りましたが例年とそんなに変わらなず維持できた。一つ残念なことは、彫刻は分母が小さいですから数の上では少ないですけれども、一〇パーセントの減少でした。私も彫刻の一員として大変責任を感じるところです。しかし同時に今の世の中、彫刻制作には厳しい時代が来た、それをどうやって日展として乗り越える力をつけるかということではないか。そのための方策を考えなきゃならないと思います。

また、展覧会が始まりました会場を見させていただいて感じたのは、各科の展示面積の配分の見直しということ。これはずつとタブー視されてきておりましたが、それも一度検討する頃では。これはまず運営委員会に検討していただいて、それで理事会の了解を得なきゃいけないことですから、でも、そういう時代に入ったなと、あまりにも書がかわいそうだなという気もいたします。

どうぞ先生方、いろいろなご発言をお願いしたいと思います。

司会 神戸事務局長、ありがとうございます。今回展の各科審査主任より、審査の方針、あるいは状況、作品の傾向などをお話しただきたいと思ひます。それでは早速ですが、一科の福田先生よりお願いいたします。

### 審査の概要

福田 今回、日本画の搬入数が若干ですが、昨年よりも九点ほど増え三三四点になりました。それはとても嬉しいことだと思っております。

大学で学んでいる学生たちに出品してもらおうと、今一生懸命になっていきます。関西の大学の大学では日展系の先生が大勢教えています。関東では二つの私立の美大で日展作家が教えていますが国立大学には日展の作家がいらっしやらないので、日展作家に教授として入っていたらと思ひながら審査をさせていただきます。審査は三、四審まで行いました。最初は全部拝見させていただきました。票以下は、申し訳なく思ひました

が選外とし、その後も丁寧に拝見し入選点数は無鑑査の点数を計算し今年は一四九点になりました。いかなと思っております。

今年の傾向としては作品が明るくなってきました。若い人たちは原色を使う事に慣れていきますから、原色をぶつけてくる絵が増えたように感じました。また、反対に伝統を意識したような墨を使ったものも有り、日本画の良さが見直される良い展示になったと思ひます。

司会 福田先生、ありがとうございます。二科の小灘先生お願いいたします。小灘 出品点数は昨年より三ポイント少なくりましたが、入選を昨年と同じくらいの感じで収めようと思っております。

審査は、時間的な制限の中で、



小灘 一紀



良い画風を見つけ出す事に気を付けながら挙手による一審、二審、三審を行い、最終的に五四一点を入選としました。新入選は六〇点でした。一つずつ個性を見つけ出して行くこと、これが洋画の大事などころではないかと思えます。少し気になることは、映像を通してそのままというか、これは写真ではないかと思う作品が多くなつて、それをどう考えて行くかという意見交換がありました。人間が手で描く、自然から感動を受けて物を描くということ以外に、映像を通して、そっくりというのか、

遠くから見るとものすごくよく描けているように見えるのですが、果たしてこれでいいのかは、今後の課題になるのではないかと思います。日展は「伝統的」とよく言われますので、特に中山忠彦先生や國領経郎先生をはじめ多くの先生方が、「伝統的な要素を持つて、ちゃんとした写真があつて、その土台の上にものを考えていく」と言っておられました。最低限度の写実力がある人は入選がしやすいということになりますね。特選はそれをもう一つこなした作品ですが、一応はきちつとした要素が基本的に描けているものは評価が高かつたと思います。それ以降は個人がどんな風に創造していくのかと思ひながら審査をしました。

司会 小灘先生ありがとうございます。続きまして三科の、池川先生お願いいたします。

池川 彫刻の審査過程についてお話ししますと、出品点数が昨年よりも八点減少しまして、今回七五点の中から六二点を入選としました。うち、新入選が九点ということでございます。無鑑査は一四四点でかなり多いわけです。総点数は二〇六点、大体この前後で入選作品の数を決めようということ、審査主任の能島先生より、一二点



池川 直

から一三点を一つのグループとして、作品をあらゆる角度から慎重に選んでいくということ、まず審査員の前でお話をされました。一点一点が見やすい形で並べて、時間をかけて選びました。そのローテーションを六回繰り返し、入選作品六二点を決めました。

二日目は特選の審査です。私たちは彫刻の要素というものを量、動勢、そしてバランス、この三つを基準に選ぶことを、まず我々彫刻の審査員の共通認識として進めてまいりました。その観点から慎重に特選候補を各審査員一人一人点ずつ選びました。総点数一三点を陳列台の上に置いて、その作品を周りから見つて投票で決めるという方法と、話し合いの中でそれを五点あるいは六点とすることとしました。結果、そういう彫刻の三つ

の要素を兼ね備えた、また日展のこれまでの具象作品の傾向と、新たな具象のあり方というものを提案していると思えた作品、六点を選びました

司会 池川先生ありがとうございます。四科の三田村先生お願いいたします。

三田村 工芸美術は様々な分野の作家が集まっております。作品も全国、四七都道府県から集まってきましたけれども、力作が集まってきた年であると考えております。特に、工芸素材については、伝統的な素材だけではなくなっています。そのことよって、新しい表現が出てきたということは、日展の工芸美術が変わっていく年が来たのではないかと感じました。

まず、立体と平面とを分けて審査をしていきました。最初は机上に並んでいる作品を遠くから見ただいて、そして全ての情報は隠した状態で個別に丹念に見てから挙手をしてまいりました。外部審査員二人の先生含めて一九人の審査の中で、一審二審三審四審で入選を決めさせていただきました。司会 ありがとうございます。次、五科の高木先生お願いい

高木 聖雨



たします。

高木 書は一昨年、国から登録無形文化財に指定され、これから書がより盛んになってくるのではないかなと期待しております。書が日展に参加したのは昭和二三年でありまして、七七年目になります。その当時の先達の先生方の技術の保存継承を通じて、それから若い人が発展させていくというのが登録無形文化財のテーマでありました。それを我々は日展においても守つていかないといけない。そういう面でもここ数年発展をさせた書というものが現れてきたのでさらに新たな作品が見られるのではないかという期待しております。

一一八回展におきましては、書は九〇五九点の出品。三九七点の出品増です。これもユネスコに登録されると影響の表れと思

ます。しかし数が増えれば増えるほど入選率は非常に厳しい。だけど厳しいがゆえに競争率も高くなって、作品の向上は間違いなくあったのではないかと考えております。

審査は最初の鑑別から特選まで、一〇日間を費やしました。

特選も入選もそうですが内容は、日頃古典を勉強したものを作品に表出して、そしてその香りのする作品を書くということ、一つのテーマとして出品者皆さん持つて書作されています。ですから、どの作品も中国古来の作品、日本の平安時代の作品を参考にしたものがたくさんあったのではないかと、とは思っております。

最後に特選ですが、特選を受賞できるのは九〇〇人に一人ということになるかと思えます。漢字が四点、かなが四点、調和体が一点、篆刻が一点という割合で計一〇点となっております。特選全ての作品が優れた作品で、本当によく頑張ってくださいなと思います。話題としては、三五年前に一回目の特選を受賞し、それからずっと忍耐強く出品されて入選を重ねて、今年、三五年ぶりに二回目の特選を受賞した人がいらっしゃいました。それは、急にうま

くなつたわけではなしに、日頃の努力があつたことで書道界としては喜ばしい一つの話題ではなかつたかと思えます。

司会 高木先生ありがとうございます。他の科のお話を聞かれて、もし何か補足ございましたら。

福田 新入選が二一名います。制作や出品が続いていないところもあるのが少し問題です。大学では皆絵描きになりたいと思います、日展にも出品してくださいですが、その後、学校を卒業すると、絵では生活が成り立たないため絵はやめてアニメの背景画等を描くような仕事やデジタルな仕事に従事する率が高いので、それを何か払拭する方法を今考えなくてはと思っております。また、なぜか関東の特選受賞者が少なくなっています。関東に限らず、北海道



福田 千恵

から沖縄まで特選受賞者が出て、そのことにより日本画を広め、作家や鑑賞者を増やしたいと考えましたが、やはり現実はその思うようにはいきませんでした。

司会 ありがとうございます。

三田村先生お願いします。

三田村 先ほど入選のことだけで終わりましたので、特選についてお話しいたします。色々な工夫を抱えている産業というのが日本各地にあります。そのエース級の人たちが出品をしておりますので、自然に候補として上がってくる作品がありました。東北から西のほうまでバランスよく選ばれたかなと思います。それぞれの分野もまんべんなく優秀な作品が選ばれたということでございます。ただ、特選を取った平均年齢が六〇歳ということで、今後はもう少し若手の人たちの中で優秀な作品があればと、思っております。それから、二〇代の出品者、大学出てすぐの方が優秀な作品を出してきておりますので、工芸美術、今後に期待できると思えました。特に、外部審査員二人の先生が工芸美術の魅力をいろいろなところで発信をいただけることを期待して、一人が一人丸となって審査できたことがとてもうれしいこと





日本画会場

続のエネルギーは保ち続けられないと敬服して居ります。日展日本画の大切な作家のおひとりだと思えます。

「中間層が元気がない」という意見があり何か解決策はないかと話し合いましたところ、特選のあたりから関係があるのではないかとということになりました。特選を日本画は通常一〇点選んできました。その中で六点程度は完璧とは言えませんが心のこもった作品が多く、それは納得出来ます。その人達は無鑑査で、展覧会場に常に陳列されるようになってからも平

均頑張っているという話になりました。ですがあとの三、四人の方は「努力しなくてはいけない」と頑張る人もいますが、大体「この程度で特選になれた」と五〇、六〇になっても動きがなくて、そういう人たちがどうも元気がないのではないかとという話につながりました。ですから、今まで日本画はできるだけ特選を一〇点と思っていました。でも八点でも、その年により、これはちょっとレベルがと思う時には点数を減らしてもいいのではないかとという意見になりました。

それがベストな答えかは分かりませんが、将来歳を重ねてもパワフルな作家でいられるためにはその辺を考えていく必要があると思います。

宮田理事長 なかなか刺激的な話ですね。  
小灘 洋画会場の一室は、今まで審査員と特選とが対峙して並んでいましたが、今年から一室と二室を最初に入った時に、「これが日展の洋画」というようなイメージを来場者に与えるために、特選を一室と二室に分けて、そして特選候補でもう一步だったというような作品と、若手の作品を中心にして、これからの人の作品を展示

しました。

それから若い人は西洋美術の歴史をあまり知らない感じがします。西洋画は、ヨーロッパから伝わり消化して、日本の洋画はこういうものだと、先進国の仲間入りをするために頑張ったと思えます。西洋人と同じぐらいのデッサン力を持って、日本化して西洋には負けない日本独自の洋画を作り上げています。しかし、そういう先人の優れた先生方のことを学ばなくなっているのが現状ではないかなと思います。文化と文化がぶち当たったときに、新しいものが生まれると言われています。それで西洋の優れたものとか、日本の良さはどこにあるのかを洋画が一番感じるところです。一九世紀までは宗教とともに芸術はあったと思うのです。それが科学の発達により人間が中心になって、そして科学が神になってしまいました。先程も言いましたように映像そのものをAIとかデジタルを使って、写真そのものみたいに、あるいは写真のような要素を絵画的に作り替えているのです。僕らがヨーロッパの考え方から学んできたことは、人間が、どちらかという自分の肉体よりも「魂」というのですかね。「物を作り出すの

は人間の魂が、それをどう表現するかというのが大事なことで、思えます。日本も自分の聖なるものというのか、心の中の崇高なものをどう表現しているのが絵画の歴史だったわけですが、それが失われてどちらかという大衆の美術というかね……

人間は「魂を揺り動かすもの」を求めていかないとけないと思いうのですが、現在はそういうものが僕らが考えていることと若い人とは全然違って、人間と科学だけが中心になって、それが神になってしまった時代は果たしていいの



彫刻会場

かどうか、問題だと思っています。

池川 彫刻の出品作品の減少にはいくつかの原因があると思われるが、若い世代は新入選も含め増えてきております。彫刻は時間と場所といろいろな条件が揃わないと、なかなかできない仕事です、特に場所のことは、東京を含め首都圏の方には、確保するのが難しいということもあります。今年には特に、夏が暑かったこともあり、彫刻の場合、粘土で作業しますからエアコンがなかなか使えないという条件の中で、特に年配の



井茂顧問の解説を受ける

逢坂恵理子国立新美術館長

方の出品数が激減しています。それをどうにかしないといけないということもありますが、作品の大きさの最大寸法が決まっていますから、その方たちも大きい作品を出そうとする傾向があります。作品の寸法をもう少し考慮していかないと、年配の方が無理をされて大きいものを出品される。

逆に若い方たちは、特に大学では最初は具象からはいりますが、人体のモデルをモチーフとして勉強してそれをさらに作品化するということと、日展に出品をする作家が多くなってきた時期があります。それが最近、教育の機関がどんどん失われていっています。教育系の大学というのが、その専門的な教員がいなくなるときに、もうその講座は閉鎖されます。やはり常勤の先生がいないと、基本的な具象的な作風の日展の彫刻は、なかなか後継者が育っていない、これが現実です。その中で初入選と翌々年と続けて特選をとった若い女性の方がいます。九州出身の女性です。今年もひとり三回目の入選で特選を受賞された乾漆像の作品があります。そういう方たちもいますから、出品者の減少をしている中では今後の期待が持てるのではないかと思います。

彫刻は本当に時間のかかる仕事です。基礎ができて、その上に自分の思いというものを何か織り交ぜて自分でテーマを決めていくという作業ですから、中堅の方たちは本当に頑張っています。逆に年配の方たちに対しては、あまり大きさを競う必要はないということ、基準を緩やかにし解決できる問題かもしれないと思います。

また、展示スペースの問題ですが、彫刻の会場に行きますと、かなり隣立しているような状態が見られます。陳列の方法にも問題があるとは思いますが、同時に、作品の大きさが大型化していますので、小さい作品をその中に置いて楽しむという。そういう要素もこの日展の中で提案するならばまたそれもいいかなと思います。また、作品を野外に出して展示する方法もあるかなと思います。

三田村 工芸美術は、全国の大学、美術系の大学の中にあります。そこから出品してくる人たちと、もう一つは各産業界です。産業界を背負ったところ、そこで代々学んでいるとか、その土地の教育施設の中から出てくる人たち、そしてあと一つは、少し年をとってから学んでいく人たちと、三つの流れの中で出品をしてくれています。そ



三田村有純

こがうまくバランスよく、日展の工芸美術はできています。それが問題意識を持って出品してくれておりますので、絡み合って日展の工芸美術の新しい姿が出てきていると思います。

今回はその中で、茨城県の笠間という産地、ここで代々陶芸をしている井上英基という方の二度目の特選作品が非常に気になりました。これは轆轤で一本引きで引き上げる技です。高木先生のよくお話しなさる書の中の緩急とか対比の理論の中でいうと、彼が言っているのは静寂と荒波の対比です。生と動というのを一本引きの轆轤で引き上げねじります。この天に昇っていく力強さ。それはやっぱり代々引き継がれた「技」なのかもしれないですが、井上さんが長年培ってきた研究の成果です。そ

ここに緑と白の釉薬がかかっています。これがまた美しいですね。こういうものに私たち出会えるというところ、日本の伝統文化産業の産地が活性化することに日展の工芸美術が役立っているということを感じております。

それから、中堅作家、会員の作品ですが、確かに会員になって少し力が抜けた方もいらっしゃるかもしれませんが、大臣賞、都知事賞、それから会員賞があります。そこをきちんと自分の将来像として狙っていきましょうという意識のある人たちがやっぱり優れた作品を作っておりますので、そこを大事に見ていきたいと思っております。

高木 目玉作品一点ということですが、書では今年度の文部科学大臣賞を取った伊藤一翔先生の作品を解説してみたいと思います。彼は日ごろから非常にいい作品を書くのですが、今年の作品は特に日展の中でも白眉ではないかというぐらい良い作品だと思えます。書というのは、今、三田村先生がご紹介してくださいましたけど、両極の美とか、高低であるとか広狭であるとか、潤渇であるとか、いわゆる対比する方法を書の中に入れて立体的に見せると

というのが基本です。あまり表現を過多にすると嫌味なものになりませんが、今回彼の作品は、それを非常にうまく配置して見る者を楽しませてくれる。音楽を聴くような感じで流れて心地よい作品に見えました。今後こういう作品が増えてはくると思います。もう一つ両極な美の表現方法を見事に取り入れている。その他に古典を習熟していながらあまり前面に出ないで、部分部分に少しずつ出してきて、それがかえって目について、いわゆる古典の香りと、表現方法とをうまくミックスして、さらに



書会場

奇を衒わず作品作りをされています。この作品をぜひご紹介できればと思っていました。

それから、実は書は特選の部屋に、準会員の作品、特選候補であった作品がまとまっています。そこに入ると、頑張ろうというような気持ちになる部屋なのですが、そこに今年、大学四年生の作品が入っています。これは多分大変な驚きを持っていると思いますけど、そういうようなことを肌で感じてより一層頑張ってくれば、まだまだ若輩ですけど、中堅作家に育っていくのではないかと、そういう人も育てなければいけないな、と最近思っているところであります。

司会 高木先生、ありがとうございます。宮田理事長のご提案で、各科今回の注目の一点を挙げいつもと違ったお話が聞けて、いい感じに進んだかなと思います。先生方のお話を聞かれて、何か補足ということがございましたら、お願いします。

小灘 洋画はあまりにも類型的な作品が多くなって、絵を描くことのエネルギが少し欠けている感じがしました。特に日展は伝統的ということ、洋画も意識を持ってやらなければと思っております。ですが、伝統という枝葉のよう

な匂いがするだけの気がします。古典では、流した血とか悲しみとかがあって、もっと崇高なものを作り出そうといつまでも思いつめて、一生未完で終わるぐらいの気持ちで描いていたと思います。レブランチやスペインのゴヤの作品、ああいう作品は日本にはないですね。ゴヤの作品のような人間の愚かさとかがヨーロッパではリズムとしてちゃんと伝わっているのですが、それを日本人はあまり受け付けない。現在、世の中は非常に殺伐とした世界になっております。芸術が科学に代って、「芸術だけが人間を、そして魂を表現する最大のもの」だと思っております。人間が絵を描き始めたアルタミラの洞窟の壁画は人間と動物との関わりを表現していますね。原始的なエネルギーというものも出していけないと、日本人は生ぬるいのではないかと思います。これからは、人間と周りとか、自然とかが格闘してような、そういうものが生まれる事を若い人に期待したいと思えます。

司会 ありがとうございます。宮田理事長、各科よりいろいろとお話が出ましたので、そのあたりで何かご感想など語っていただい

たら、と思います。

宮田理事長 先生方ありがとうございます。本当に先生方、真剣に問題意識を持ってお話をなさっているのを聞きまして、まさしくその通りであると感じました。それらについて簡単に打開策を求めることは、僕は危険だと思えますね。これはある意味では本当に徹底的にどうしようかということを実験的に、自分のなかだけではなく、先生方同士お話をされて解決することが結構あるのではないかなという気がしました。例えば、若い人でも中堅の方で



工芸美術会場

も、しっかりと自分の作品に向き合っていたら、その方たちを先輩諸氏がより高みに導くよう指導することが必要な、という気がするんです。

ちよつと個人的な話ですけれども、大樋年朗先生のお別れ会の中に、僕は思わず話したことがありまして、昔、大樋先生からかけられた「宮田君、去年より、いいね」、この一言が、どのくらい自分を勇気づけたかというのがあって、それをお話しさせていただいたんですが、そのような感じで、日展ニュースを見たときに「自分の作品(記事)が載っている」、となれば真剣に読むと思うんですよ。だからそういうこともあっていいのかなと。

また、特選一〇点必要かな、というのと同時に、逆に賞をあと何点か増やす、そういう持つていき方というのも今後は考えられる。中堅の先生に対してもそのぐらい心に刺激を与えるようなことをやっていただければ、とてもスリリングな審査になりますね。

司会 先生、ありがとうございます。では最後に神戸事務局長より全体的な座談会のまとめをお願いいたします。

神戸事務局長 今、宮田先生か

ら良い提案をいただきました。作品が素晴らしければ大臣賞を一般入選から選んでもいい、それくらい柔軟に考える我々でありたいな、と感じました。私たちが育った学生時代「革新は古典を生む。でも古典からは前衛は生まれません」。古典を求めたのではなく革新を追求することで古典に達する。」と、先輩からよくいわれました。何が正しいかは分かりませんが、古典・前衛・革新、この言葉の定義を我々は肝に銘じ、若者達と接しなければならぬ、という気がいたしました。

長々となりましたが、今日はとても良いお話をいただき、ありがとうございました。先生方のさらなる取り組みを期待いたします。本日の座談会を終了と致します。司会 本日は長時間にわたり、



司会 西田 真人

有意義なお話をたくさんいただきました。それでは、これで座談会を終わらせていただきます。諸先生方ありがとうございます。

(おわり)

令和7年11月14日(金)

於 国立新美術館 地下一階  
審査室D

叙勲

令和七年十一月

瑞宝重光章

宮田 亮平 (日展理事長)

旭日中綬章

土屋 禮一 (日展理事)

能島 征二 (日展理事)

## 次世代を見据えた審査

第一科日本画 美術評論家 清水康友

此の度第一一八回日展の外部審査員として、第一科日本画の審査に参加した。永い歴史と功業を有する日展と、本展に向け鋭意制作してきた出品者に敬意を払い、気を引き締めて臨んだ。審査員構成は、日展側の一七名と外部二名の合計一九名で、この内部と外部の審査員は毎回入れ替る。これにより日展審査は毎年常に新たな目と感性により行われ、偏向の無いものとなるのである。内部の審査員は全員が日本画の制作者で、外部の筆者と岡泰正氏の二名が作品を観る側の立ち位置となり、より立体的な審査が行えたと思う。この外部審査員の制度は、現代日展では比較的最近からだだが、明治四〇年の文展創設当初には、実制作者に加えて美術史家や評論家、美学者等も加わっていたのである。美術団体展としての日展の役割は、出品作品から優れたものを選び出して優秀な制作者を選出して顕彰、その作品を人々の鑑賞に供する事である。これにより次世代を担う画家を見出し、育成してゆく事である。

審査を行うに当っては、日展審査員のガイドラインが予め示されており、これは大変厳正なものであった。入落審査に関しては作品の細部にまで目が注がれ、殊に激戦であった特選選考では、候補作品の推薦者が全審査員に対してその理由を述べ、単に数の論理だけではない点が印象に残った。会員賞、東京都知事賞、内閣総理大臣賞は、選考会議で様々に論議が交され、各賞に適う作品が決定した。

日展の日本画が我が国の近代美術に果した功績を再認識した上で、今後は社会性や死生観等、対外的にまた人間の内面を探る作品にも期待したい。今回の一八回展では、次世代を見据えた鑑審査が行えたものと感じている。



清水康友（しみず やすとも）

一九五四年、東京都生まれ。早稲田大学教育学部卒業。全国農業組合連合会（JA）美術委嘱コンサルタント、損保ジャパン美術展推薦委員、淑徳大学エクステンションコース講師、富山国際現代美術展メインパネリスト、市川市美術品購入審査会長等を歴任。美術評論家として活動。現在、国際美術評論家連盟会員。

## 多様性の奥行にふくらみを——審査をおえて

第二科洋画 世田谷美術館長 橋本善八

初めて外部審査員という重責を仰せつかりました。これまで美術館員として、多くの美術家の皆様とお会いし、作品を拝見してまいりました。もちろん、そのなかには日展に出品されている諸先生との出会いもありました。

さて、審査時の私の座席は最前列のため、周りの先生がたの様子は、まったくわかりません。ただ、それだけに現場の気配に影響されず、自身の意志で審査にあたることができました。

日展は、いくつもの有力な団体からの出品が多いことは承知していましたが、それでも、洋画部門の応募作品は減ってきているのご説明がありました。ただ、美術を愛好し、日々創意工夫を重ね、美を追い求めて創作を続けていらっしゃる方が、これほどに多いという事実は驚きであり、全国各地で日々絵筆がふるわれていることを想います。日展の存在意義をあらためて考えるに至っています。

同時に、ひとりの外部審査員として感じたことは、題材の選択や表現方法に大きな偏りがあったことです。第二科の審査主任をつとめられた小灘一紀先生も「審査所感」で、「残念なのは、技術は高いが類型的で個性を感じる作品が少なかった」と記されており、私もまったく同じ感慨を得ました。

「写実」を本道とされていることに異を唱えるという意味ではなく、その本道を基盤としつつ、自己を見つめ、その内面から湧き上がってくる感動や情熱が、作品に生命を吹き込むのだとすれば、それは絵画という表現のなかに自己実現を果たすということなのではないかと考えるのです。個人的で独特な心情の具現化が絵画表現の醍醐味だとしたら、多様性の奥行に、より豊かなふくらみがまわっていくことに、私は期待させていたのだと思います。



橋本善八（はしもと よしや）

一九六〇年、東京都生まれ。和光大学人文学部芸術学科卒業。一九八六年、世田谷美術館入職。日本の近現代美術を中心に、美術の周縁に、美術の周縁を担当。同館学芸部長、副館長を経て、現在、世田谷美術館館長。

### 第三科彫刻の審査にあたって

第三科彫刻 山梨県立博物館長 筑波大学名誉教授 守屋 正彦

今年度開催の大阪万博では多くの会場でAIや映像、デジタル技術が紹介され、「いのち輝く、未来社会のデザイン」がテーマであった。そのような中であって、イタリア館では歴史的な芸術作品が人気であった。なかでも「ファルネーゼのアトラス」は古典古代の代表的な具象彫刻として多くの観客の注目を集めた。

日展は文展以来の具象彫刻を伝統とし、人体を多面的な視点でとらえ、意にかなう写実的な表現を追求している。

一般公募では六十二点が入選し、六点が特選となった。初入選作品の多くは写実に基づく愚直なまでの表現を示す。思うに、それぞれの像が語るストーリー、作家のメッセージ性には、いまだしの感があるが、いずれの作品も将来性が期待できるものであった。

文部科学大臣賞を受賞した堤直美氏の「双笛譜」はタイトルが作品と絶妙に呼応し、背中合わせに笛を吹く二人の女性像のしぐさが有機的に結びつき、見事なハーモニーを奏でている。都知事賞、会員賞の各氏も達意の技術力が感じられた。

具象の造形は自然界に実在する形象を創造の源泉としている。抽象表現の、幾何学的抽象や想像的な造形の具体化とは違い、作家は人や動物などの自然界の形象に身をゆだね造像する。その表現に派手さはなく、鑑賞者に強烈なメッセージを伝えていないかもしれないが、静謐でありながら、日常の愛、生きる意思、聖なる祈りなど、その時代の気分がうかがわれる。また、人体の造形で言うなら、力強さ、伸びやかさ、柔らかさ、さらに老いや若さ、微笑み、慈愛などのヒューマニズムが内在し、穏やかでしわりと伝わる。ところに具象彫刻の魅力がある。益々の精進を願い、時代を代表する新しい造像を期待したい。



守屋正彦（もりや まさひこ）

一九五二年、山梨県生まれ。東京教育大学（現・筑波大学）博士（芸術学）。山梨県立美術館学芸課長を経て、筑波大学教授。現在、山梨県立博物館館長、太田記念美術館理事、筑波大学名誉教授。著書に『すぐわかる日本の仏教美術』『すぐわかる日本の絵画』、監修に『日本美術図解辞典』（東京美術）など。

### 第一一八回日展第四科工芸美術の審査を終えて

第四科工芸美術 岐阜県美術館副館長 正村 美里

外部審査員として、高波真知子先生と共に五日間にわたり審査に関わらせていただいた。およそ一年を掛けて構想を練り、本番に向けて試行錯誤を重ねた末にこの日を持つ出品者の方々の心情を思いながら、制作の意図、技法の駆使、完成度に至るまで、限られた時間の中、見落とすことのないよう心して拝見した。

テーマや表現はもとより、工芸の基本である技術と仕上げの美しさ、何故そこに至ったのか、最終ゴールを設定する上での加減についてくみ取りつつ、入落の境界を自身のなかで明確に設けることを心掛けて審査にあたった。

一世紀を超える歴史をもつ団体公募展の規模と重圧は、無意識のうちにながしかの型、既成概念、逡巡を作家に課していないか——当初そんな懸念も抱きながら審査に挑んだのだが、実際の作品は、各々自己の創案を実現すべく技と経験を駆使し、強いパワーをもつて迫ってきた。また、特選候補にまで残った作品には未来の工芸を「日展カラー」の中で大胆に映し出しているものも多く、この潮流こそが日本の工芸を支える柱のひとつであることを実感した。だが一方で、表現に囚われるあまり、仕上げが今ひとつと思われる作品も見受けられた。

偶然この夏、自館の企画展のために日展の工芸部門設立時の歴史を紐解いていたのだが、昭和二年の帝展第四科（美術工芸）の開設は、多くの工芸家たちの悲願であり強い運動によってなし得られたものであり、その直後は、旧態の変革を訴えた若い金工家たちの作品が、早々に特選を受賞している。

時代を変える、次代を創るといふ熱い想いを土台に歩んできた第四科が、今も自由でチャレンジングな発表の場であることを、より多くの作り手に広く知らせてほしいと切に願うものである。



正村美里（しょうむら みさと）

岐阜県生まれ。一九八三年より岐阜県美術館学芸員として国内外の近現代の工芸を中心に調査研究、企画を行う。岐阜県現代陶芸美術館学芸部を経て、現在、岐阜県美術館副館長（二〇一六年）を現職。

## 外部審査員の感想と日展の大きな期待

第五科書 磐前啓人 皇居三の丸尚蔵館長 島谷弘幸

少子高齢化の波は多くの公募展にも及んでいるが、日展も例外ではない。高齢者や若年層の出品数の減少、さらに地域差なども見られる。大学卒業などの環境の変化による不出品への対応も課題の一つであろう。「書」は幸いに微増という出品数を数えた。とても嬉しいことではあるが、展示会場に限りがあるので、微増であっても出品増加は入選率の低下、すなわち厳しい審査となるのである。

篆刻、調和体から審査が始まるが、漢字とかなは点数が多いので審査員が別れての審査にならない。良い作品を落とすのは避けたい。と多くの作品に熱い視線を向け続けた。私は外部審査員であるが、自らが審査されている気持ちで緊張を余儀なくされた。この作品を落とさざるを得ないのかと心が痛む審査でもあった。かなの審査は七番に及び、漢字はそれを上回る審査を重ねた。最終の特選を決める時に再び合同審査となるが、漢字、かな、調和体、篆刻とバランスの良い個性的な作品が選出された。古典の学書を基本とする書であるが、伝統を遵守する作品も見られるが、その多くが時代とともに少なからず変化し、個人の美意識を加えた多様性が見られる。改組して一〇年の間にも変遷が見られる。古典と呼ばれる作品が各時代の現代書であったのと同様に、今日の日展が古典となっていくのである。

日展をさらに活性化するために、各分野で固定化されている展示会場が、多少の混乱はあるかもしれないが、時折、分野ごとの展示室の変更もあってよいのではないかと、懇親会で日頃の思いを発言した。また、展示の名札に、理事長・理事などの役職や、会員、今年度審査員、特選、新入選などの色分けをすることも来館者サービスになるのではないだろうか。



島谷弘幸（しまたに ひろゆき）

一九五三年、岡山生まれ。東京教育大学（現・筑波大学）教育学部芸術学科書専攻卒業。東京国立博物館学芸部美術課書跡室長、資料課長、展示課長、文化財部長、学芸研究部長、副館長（兼）独立行政法人国立文化財機構本部研究調整役を経て、国立文化財機構理事長、九州国立博物館長を歴任。現在、独立行政法人国立文化財機構理事長、皇居三の丸尚蔵館長。

## 第一八回日展イベントレポート

※今年もたくさんの方が参加してくださいました。この様子はHPでご覧いただけます。

### 『講演会・シンポジウム・映像による作品解説等』

今回は、日本画家の千住博氏を迎えて、特別講演会「私と日展」を行いました。会場を歩きながら、千住先生の体験をもとにいきいきと語られた日展の巨匠たちのお話など非常に内容が濃く、満席の来場者を魅了しました。



- 『ミニ解説会』
- 『らくらく鑑賞会』
- 『グループ解説』— スクールプログラム—
- 『触れる鑑賞』プロジェクト

## 『わくわくワークショップ』

二十四年目を迎えた『わくわくワークショップ』。



会期中、日曜日の三日間、午前・午後の全六回で、昨年を上回る応募をいただきました。指導作家が子供達のために考えたプログラムを体験し、参加者は短時間ながら充実した時間を過ごせたようです。この様子はHPでご覧いただけます。



『手紙を書こう!』 『わくわくワークショップ』の鑑賞カードから発展した、『手紙を書こう!』では、六回目の今年も四八六通のお手紙をいただきました。昨年手紙のやり取りをした作家の作品を見るために来場し、その感想をポストに入れる参加者も年々増えていきます。若い鑑賞者と作家、作品を「手紙」がつかないでくれました。今後も「日展だからできる」普及事業を展開してまいります。

## 大臣賞受賞作品制作意図

## 東京都知事賞受賞作品制作意図

## 日展会員賞受賞作品制作意図

### 内閣総理大臣賞 第一科（日本画）

岸野 圭作「微風」



自宅付近のいつもの道を散歩しながら、生い繁る雑草の中を微かに吹き抜ける風の跡に、越し方の刻の流れを思いました。

### 東京都知事賞 第一科（日本画）

大豊 世紀「温室」



猛暑の日々が続いたこの夏、ふと思い立ち、とある温室に行った。案の定温室は暑く息苦しかった。衰え行くものに対してシンパシーを感じる近頃である、枯れつつある植物に感じるものがあつた。明度を現実よりも落とし、昼より夜を意識するように描き進めた。

### 日展会員賞 第一科（日本画）

長谷川雅也「蒼列」



気候変動と世界情勢に心痛む昨今、花頭を頂垂れ黒く焼け枯れる向日葵の列が胸に刺さり原案となった。日頃の支心と今回のテーマを構成し、只の現状説明でなく未来への希望と心の躍動が共に感じられる絵肌に苦心した。偶然のマチエールの響き合いや加筆の加減に時を費やした。

### 内閣総理大臣賞 第二科（洋画）

大谷 喜男「マイ・ウェイ」



高校二年生の時に油絵を始め、思うように描けない違和感は、今でも鮮明に残り今なお引きずっています。試行錯誤を重ね単なる写実的表現ではない造形感覚が身に付いてきたように思います。今回の作品は、人物を通して青が浮かびました。緊張感と新鮮さを意識して描きました。

### 東京都知事賞 第二科（洋画）

平野 行雄「赤瓦のある島の集落」



沖縄の島々には強い陽射しを受け、漆喰のある赤瓦の家々や亜熱帯の植物、サンゴの石垣や白砂等の美しく心引かれる風景が点在しています。現場で多くの写生をし、再構築して今回は画面全体の色彩のハーモニーに重点を置き、感動が伝わるよう表現できればと思つて制作しました。

### 日展会員賞 第二科（洋画）

池上わかな「希望の雫」



今は使われていない建物に差し込む光が、暗い室内をそっと照らす。その光に未来への希望を重ねたいという思いで描きました。影の部分は、陰気さではなく深みと温度を感じられるよう意識し、観る人それぞれの物語に希望を感じていただけることを願っています。

文部科学大臣賞 第三科(彫刻)

堤 直美「双笛譜」



背中合わせの二人、一九世紀のフルートの名手、ドップラー兄弟がそれぞれ利き手が違った事に想を得て、たとえ考えが異なったり、思想が真逆であっても、美しいハーモニーを生み出す事が出来るのではないか。分断する世界に一筋の光を求めて平和の象徴として制作致しました。

東京都知事賞 第三科(彫刻)

島田見根夫「いつの日か」



作品は、彫刻を始めたころを振り返り、社会に出たころの希望に満ちた未来ある姿を、青年の木彫刻で、取り組んでみた。ポーズは単純なので、安定した姿勢で立つよう心がけ、着衣の表現は深く彫りこまず皺の数、折り返しは控え、木の状態を見て、着色を施した。

日展会員賞 第三科(彫刻)

緒方 信行「記憶の風」



爽やかな風に、記憶が目覚めようとする。…と同時に、これまでの自分自身の人生もよみがえってくる。「大自然と人間の存在」が私の彫刻のテーマです。坐像は腕や脚による構成が工夫できるポーズだとは思いましたが、「芸術とは何か」という事を悩みながら制作を続けました。

文部科学大臣賞

第四科(工芸美術)

村田 好謙「生命の泉」



「生命の泉」は、自然に息づく、いのちの循環をテーマに制作しました。天空から降り注ぐ光と水、蓮の葉に宿る泉——それらが響き合う瞬間に、生命が生まれ、やがて還っていく永遠のリズムを感じます。その静かな循環の中に、存在の尊さと再生への希望を見だし、光と水の表情を通して、生きることの輝きを表現しました。

東京都知事賞

第四科(工芸美術)

高津 明美「阿蘇煌然」



阿蘇の雄大な山々に朝の光が輝き始め山の麓には朝霧が立ち込み始める。朝霧を細い線の柔らかい楕円形で描き透明感のある重なりを表しました。  
ろうけつぞめ 臙染です。

日展会員賞

四科(工芸美術)

河合 徳夫「芙蓉」



九月、未だ残る強い日差しの中で輝く芙蓉の花に心引かれ制作しました。  
磁器の白さと思いを重ね、薄いレリーフでも立体的に見える様、数色の化粧土と色釉を重ね表現しています。

文部科学大臣賞

第五科(書)

伊藤 一翔「杜甫詩」



関西は昔から明末清初の能書家を学んだたくさん作家を輩出してきました。今回の作品は清末の呉昌碩の尺牘の自在さに傾注し、丁度コロナの初め頃全集を入手して毎日毎日臨書し続けました。そのエキスが自然と入っているのかもしれない。更に精進せねばと思っています。

東京都知事賞

第五科(書)

野田 正行「月待つと」



「王羲之」の草書を念頭に置き、柔らかさの中に力強い線をとの思いで、羲之の何かが取り入れられたらと思いつつ書作いたしました。今回は特に、ベートーベン「運命」を意識した構成にし、作品の中心を書き出しの一行目から四行目まで持つてきてみました。

日展会員賞

第五科(書)

西村 東軒「方城臨々」



今回の題材から先ず優美でスマートな白鷺城が目につく。横展開の作品を企画、それぞれの文字が自然な距離を保ちつつつきりと伸びのある明るい作品を目指した。構築的な書体の中で線と線の連続性、強い線としなやかな動きが融和するようなものを目標に筆を執った。

第二一八回日展 新入選者寄稿 ―喜びと抱負―



(日本画) 奥田 桜子

今回初めて一五〇号という大きさの絵を描き、未熟な点も多々ありながら完成したときには何にも勝る喜びがありました。

この作品は日本の刺青について興味を持ち、様々な資料を調べ資料館にも足を運び、自分なりの解釈で人々の苦悩や葛藤を刺青との融合という表現で挑戦しました。日展に入選でき展示されることで、自分の絵が多くの人の目に入る機会が与えられたことがとても感慨深く嬉しく思います。



(日本画) 吉川 綾

飼い犬をモチーフに一五〇号に初めて挑みました。構想、小下図の段階で犬が死んでしまい、大画面を前にして犬の毛描きはなかなか進まず、くじけそうになる時もありましたが、何故か安らぎを感じる作業でもありました。

最後まで仕上げて出品することを目標にがんばりました。入選できたことは大変嬉しく光栄に思います。これからも新しい気持ちで制作に励んで参ります。



(日本画) 米田 陽稀

毎年訪れている天草の湯島へ取材に行きました。何度訪れても感じる島独自のゆっくり、のんびりと過ぎる時間と空気。いつもの日常とは違って、原付はあっても車がない。でも猫がいる。沢山いる。そして人懐っこい。そんな大好きな島と猫たちを描きたくて制作しました。

日展という大きな舞台で入選できたことを感謝しながらこれからも楽しく、好きな物をとことん制作していきたいと思えます。



(洋画) 瀧ヶ崎 正彦

この春、中央の公募展に初出品したことが契機となり、県内の絵画研究会に加えていただきました。月に一度、画材店の二階でデッサン会があり先生の脇で共にデッサンしながら、対象に向き合う、厳しい姿勢を学んでおります。

またこの度は、諸先生のご指導により、遠い夢であった日展新入選の喜びを味わうことができ、心から感謝しております。さらに会には、九十歳を超えられる方が今年も日展に入選され、大きなお手本とさせていただいております。



(洋画) 中田 里美

念願の初入選、湧き上がる喜びと共に導き励まして下さった方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

作品「還らぬ刻」は、先立った連れ合いへの想いをモデルに重ねて描きました。静かな中にも凛とした方に巡り合ったのも幸いでした。十数年日展はあこがれと同時に、自分には程遠い所と打ちのめされる存在でした。その会場で作品が展示され身が引き締まる思いです。心新たに想いや感動が伝わる作品を描けるよう精進して参ります。



(洋画) 堀 なお子

初入選、心より感謝申し上げます。

何より嬉しかったのは、私が長く続けている地域アトリエの小中学生がご家族と日展を訪れ、それぞれがお気に入りの作品を見つけ、楽しそうに教えてくれたことです。日展は、このように社会に開かれていくのだと思いました。

今後さらさら研鑽を重ねるとともに、美術をより身近に感じていただけるような、親しまれやすい絵描きでありたいと考えております。



三年前、第四十一回日展作品集に掲載された一点の作品に一目惚れをし、いつか自身の作品も掲載できればと夢見てきました。そして今回初挑戦の日展にて入選できたことを大変嬉しく思います。本作は作品を前にした人が心地よい時間を過ごせるような作品になるようにと制作しました。私を支えてくださっている多くの方々の期待を胸に、この恵まれた環境に感謝する気持ちを忘れず、これからも作品作りに精進してまいります。

(彫刻) 細井晴太



この度は初入選という結果を得られ、大変嬉しく思います。今までは作品を鑑賞する側の一人でしたが、今回自分の作品が会場で鑑賞され、写真に撮られている場面を目の当たりにし驚きも感じている状況です。本作品は現時点で自分ができることを最大限行い、粘土から石膏に置き換えた後にもより良い形が現れるよう時間をかけて制作しました。この経験を糧に、今後も自分の表現したいことをより自由に形にできるように精進いたします。

(彫刻) 中村日香



高校で美術を学び、彫刻に惹かれて以来、憧れであり目標でもあった日展に初入選することができました。本制作を通じ、人体の構造や造形的な思考のみならず、制作に真摯に向き合う気持ちや、制作を続けることの重要性を強く実感しました。また指導して下さった先生方や私の家族など、恵まれた環境の支えによって今の自分があることを深く感じています。現在大学一年生、今後も感謝と向上心を忘れず、野心をもって制作に励みます。

(彫刻) 大林勇輝



初めて職場の研修で触れた陶土の心地よさ、それから三十年余りたった今でも、まだ指先が覚えていきます。現在は、自宅の電気窯と仲間と築いた穴窯の二つを軸に制作を続けています。地球というこの星の土を捏ね、熱や炎で焼くささやかな行為が、今まで常に私を内から支えてくれました。今回、日展に初入選の機会を頂き、心より感謝いたします。この経験を新たな出発点とし、今後も精進して参ります。

(工芸美術) 和田美希



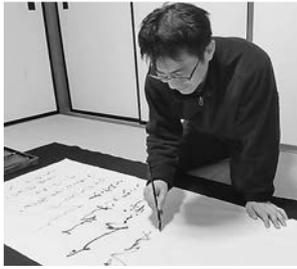
漆の唯一無二の艶に魅了されて大学で漆を学び、毎日真摯に制作へ向き合う恩師の姿に深く憧れ、日展への出品を志しました。初出品には大きな不安もありましたが、自身の成長を願って挑戦し、入選という結果と共に多くの素晴らしい方々との出会いに恵まれました。私は、自己と他者の間に生まれる微細な感情を作品へ落とし込むことを大切にしています。今回の経験を糧に、これからも人との関わりを深めながら制作を続けていきたいです。

(工芸美術) 小林このみ



高校から陶芸を学び、大学卒業後も制作を続けてきました。約十年前から毎年日展に挑戦し今回初入選と成りました。今回の作品は、球体から上に伸びる形をイメージし、釉薬は上から下に流れるものにし、自分の中で納得するものが出来ました。今後も先生方への感謝の気持ちを忘れず、より良い作品を作るよう精進してまいります。

(工芸美術) 伊藤航太



(書) 西尾 武範

憧れの日展、その入選発表日に覚えた高揚感は今も忘れ得ません。生まれる前に世を去った日展会友の祖父の存在を、今はより身近に感じています。今回の作品は大字で和歌一首。迫力と広がりのある作品を目指しました。会場に並ぶ珠玉の作品の前に、汗顔の思いを抱きつつ、書は点と線、黒と白の芸術であるという原点を再確認した気がします。遥かに深遠な書の道ではありますが、この入選を一里塚として、さらに精進して参ります。



(書) 国本 柳 邨

日展初入選の知らせを頂き、大きな喜びと感謝の気持ちで涙が止まりませんでした。書き進める中で感じた高揚感や迷いを抱きつつ、作品全体の密度と流れを意識しながら心を込めて丁寧に向き合いました。日頃よりご指導くださり成長を支えてくださった先生、温かく励ましてくださる書友の皆様、そしていつも応援してくれる家族に、心より感謝申し上げます。これからもより深い表現力を目指し研鑽してまいります。



(書) 猪ノ原 真理子

憧れであり目標としていた日展入選は、三歳から書道を始めた私にとって、名誉ある喜びです。応援してくれた家族も一緒に喜んでくれました。今回の作品は、扇面に美しい余白・格調高い文字を意識しつつ、力強さと「味わいのある」「風趣漂う」世界観を表現できるよう努めました。日ごろ、熱心にご指導くださる師匠に心より感謝申し上げます。これを機に、恵まれた環境で更に一意専心で書に取り組んで参ります。



(書) 松尾 鴻

初入選しましたこと心からうれしく思います。最近では作品の出来だけでなく次世代に「日本の書」の文化を伝えなければという思いを強くもっています。日展は、その粋を究める場であると感じています。私もその場に参加したいと一念発起し出品させて頂いたことができました。出品作は、筆墨硯紙を吟味し淡墨・羊毛長鋒を使い少字数書の作品として仕上げました。書の伝統に立脚した新しい書を探求するよう努めて参ります。



(書) 松枝 龍峯

一八八年と言う歴史と伝統のある日展に初入選の栄誉を賜り、感激と喜びで胸がいっぱいです。と同時に身の引き締まる思いです。これまでご指導くださった師をはじめ、さまざまな方々に心より感謝申し上げます。今作は金文特有の温かみのある線状と文字の疎密効果を主眼とし、制作にあたりましたが、理想の作品には到底及ばず改めて力量不足を痛感しております。今後はこの入選を励みに更なる努力研鑽を重ねて参る覚悟でおります。



(書) 卷山 昱偉

日展初入選の喜びを噛みしめつつ、支えてくださった皆様への感謝の思いを一段と深めました。本作は金文をもとに、潤渇から生み出される明るさを意図して制作しました。制作を通じて今後の課題も明確になりました。今後は技術向上に努めるとともに、教育を通して書の魅力を継承し、その発展に微力ながら寄与していきたいと思っております。

第118回日展 入場者数 (国立新美術館)

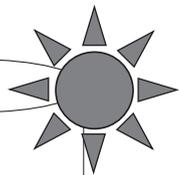
| 月日    | 曜日  | 天候   | 入場者数(人) | 月日    | 曜日 | 天候   | 入場者数(人) | 月日                                      | 曜日  | 天候 | 入場者数(人) |
|-------|-----|------|---------|-------|----|------|---------|---|-----|----|---------|
| 10/30 | 木   | 晴    | 3,151   | 11/8  | 土  | 晴    | 3,108   | 11/17                                   | 月   | 晴  | 3,899   |
| 10/31 | 金   | 曇のち雨 | 5,651   | 11/9  | 日  | 雨    | 3,704   | 11/18                                   | 火   |    | 休館日     |
| 11/1  | 土   | 晴    | 2,931   | 11/10 | 月  | 晴一時雨 | 3,108   | 11/19                                   | 水   | 晴  | 4,129   |
| 11/2  | 日   | 晴    | 3,247   | 11/11 | 火  |      | 休館日     | 11/20                                   | 木   | 晴  | 3,826   |
| 11/3  | 月・祝 | 晴    | 3,329   | 11/12 | 水  | 晴    | 3,152   | 11/21                                   | 金   | 晴  | 4,029   |
| 11/4  | 火   |      | 休館日     | 11/13 | 木  | 曇    | 3,846   | 11/22                                   | 土   | 晴  | 6,159   |
| 11/5  | 水   | 曇    | 2,380   | 11/14 | 金  | 晴    | 3,818   | 11/23                                   | 日・祝 | 曇  | 6,784   |
| 11/6  | 木   | 曇    | 2,086   | 11/15 | 土  | 晴    | 4,877   | 入場者数84,884名 (平均3,858名)<br>※10/30は出陳者内覧会 |     |    |         |
| 11/7  | 金   | 晴    | 2,464   | 11/16 | 日  | 晴    | 5,206   |   |     |    |         |

第118回日展 応募点数及び陳列点数 (新入選数は入選数を含む)

|                | 日本画         | 洋画            | 彫刻         | 工芸美術        | 書               | 合計               |
|----------------|-------------|---------------|------------|-------------|-----------------|------------------|
| 応募点数<br>(前年度比) | 344<br>(+9) | 1,372<br>(-3) | 75<br>(-8) | 587<br>(-5) | 9,059<br>(+397) | 11,437<br>(+390) |
| 入選点数<br>(新入選数) | 149<br>(21) | 541<br>(60)   | 62<br>(9)  | 457<br>(34) | 1,136<br>(172)  | 2,345<br>(296)   |
| 無鑑査点数          | 139         | 122           | 144        | 114         | 143             | 662              |
| 陳列点数           | 288         | 663           | 206        | 571         | 1,279           | 3,007            |

第118回日展巡回日程(予定) 会期は変更することがあります

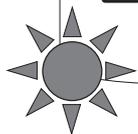
| 開催地 | 会期                | 会場              | 開催者                      |
|-----|-------------------|-----------------|--------------------------|
| 東京  | 令和7年10月31日～11月23日 | 国立新美術館          | 公益社団法人日展                 |
| 京都  | 12月20日～令和8年1月17日  | 京都市京セラ美術館       | 日展京都展実行委員会               |
| 名古屋 | 1月28日～2月15日       | 愛知県美術館ギャラリー     | 中部日展会                    |
| 大阪  | 4月16日～4月25日       | 大阪市立美術館天王寺ギャラリー | 公益社団法人日展                 |
| 安曇野 | 5月2日～5月31日        | 安曇野市美術館         | 安曇野市美術館<br>公益財団法人安曇野文化財団 |
| 金沢  | 6月6日～6月21日        | 石川県立美術館         | 北國新聞社                    |



教えて、作家さん！

わくわくワークショップ

「手紙を書こう！」



はじめ目にしたときから、心にすごく残って、通るたびに目に入って、何度見てもこの絵に心うばわれて、とても不思議でした！見るたびに絵が鮮明にみえてきて、はじめはよみとれなかった草々、木々がみえ、さいごに黒猫を発見した時、この絵をやっと見れた気がして、とてもうれしかったです！この絵がとても好きになりました!!  
あなたの作品に出会えてよかったです！とても好きです。

紗良さん 16歳

私の絵をとても丁寧に観ていただき、またすてきな感想を寄せてくださって、ありがとうございました。この作品は私の町にある植物園で取材して描きました。温室の窓に映り込んだ木々の影と温室の植物等を重ねて、少し現実から離れたように描きました。黒い色の変化も大切にしました。鳥や猫も描き入れることで、物語（ストーリー）が感じられるように工夫しました。自分なりに考え挑戦して描いたので、この絵が紗良さんの心に残り、「とても不思議」と感じてもらえたこと、嬉しいです。これからもいろいろな作品を観て感じて楽しんでくださいね。

小野美恵子

「わくわくワークショップ『手紙を書こう!』という、小・中・高校生から気に入った作品の感想や質問を集める企画を実施しました。6年目の今年も486通のお手紙をいただきました。



(洋画) 齋藤 均 <<雪解けⅡ>>



(日本画) 小野美恵子 <<Shadow>>

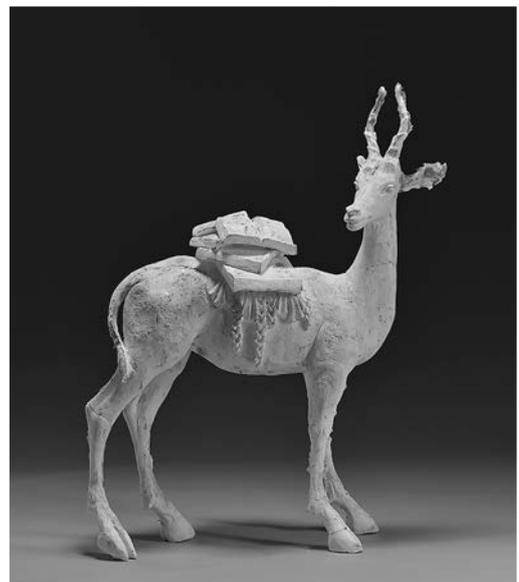
ふつうは石膏が多いけれど、紙で作っていたので、びっくりしました。動物を作っている人は少なかったの  
で、とても良い思いつきだったのかなと思いました。

あと、わたしは人を作っている人が多いと思っていたけれど、動物のしかを作っているのを見て驚きました。しかの優しい顔を見て、心がほかほかしました。

千紗さん 10 歳

私の作品についてお手紙を書いてくれてありがとうございます。紙の彫刻作品は少ないですが、奈良時代には紙製の仏像があるように、昔から反古紙などを活用した造形物はつくられてきました。この作品も意外と丈夫で、カビも生えません。多少の水や炎にも負けませんよ。この動物は実はインパラをもとにつくったのですが、インパラはシカにとってもよく似ています。顔の表情は、“なんでもうけいれてくれ” そうに思うようにつくったので、千紗さんの感想がとてもうれしいです。

高石麻代



(彫刻) 高石麻代

《すべての物語の少女たちへ》

遠くから見ると水が波うっているように見えて、白と黒だけかと思ったら、黄色や青も入っていて、とてもきれいな作品です。鳥も羽の色合いやながれも美しく表現されていて、すごいと思いました。枝も一本一本に存在感があり、まるで本当の風景のように思いました。

とてもきれいな絵で感動しました。今日、日展に来られてよかったです。これからも美しい作品をたくさん作ってください。

珠央さん 11 歳

私の絵に興味を持っていただきありがとうございます。この絵の水面の捉え方や雪の表面の色、野鳥の表情など凄く細かく見ていただき、私も嬉しいです。これからも若い世代の方々の日展を知っていただくことで、未来に繋がって行くと思っています。今後も皆さんに感動していただけるような絵を描いていきたいと思っています。また日展を見に来てください。

齋藤 均

●個人

- 東 晋一郎様 新井演子様
- 飯田真未様 石崎國夫様
- 井谷善恵様 井上道守様
- 今田功一様 今村忠司様
- 岩田 薫様 梅崎 壽様
- 角井 博様 兼重勇希様
- 栗原直子様 呉 祐輔様
- 黒田浩平様 児玉安司様
- 近藤慎男様 坂本美賀子様
- 佐川かおる様 澤井和行様
- 高木和美様 高木寛史様
- 田頭明子様 田頭益美様
- 高橋千笑様 竹尾明子様
- 竹本葉子様 田中宏欣様
- 土屋礼央様 寺岡宏高様
- 中室里恵様 西田俊通様
- 西村潤帰様 西村友子様
- 野田裕一様 藤田理恵子様
- 藤本真之様 堀 稲子様
- 宮島幸男様 村里 暁様
- 森寫順子様

●法人・団体

- 株式会社 IDホールディングス様
- 株式会社 大垣共立銀行様
- 岡崎信用金庫様
- 株式会社 玉蘭堂様
- 謙慎書道会様
- 一般社団法人 光風会様
- 公益社団法人 創玄書道会様
- 株式会社 高山草月堂様
- 株式会社 千葉銀行様
- 株式会社 筑波銀行様
- T&Tパートナーズ法律事務所様
- 一般社団法人 東光会様
- 東洋額装 株式会社様
- 株式会社 西文明堂様
- 公益社団法人 日本書芸院様
- ニューカラー写真印刷 株式会社様
- 株式会社 原汲古堂様
- 一般財団法人 ビオトピア財団様
- 福井素鳳堂様
- 有限会社 みなせ筆本舗様
- 一般財団法人 桃園学園様
- 株式会社 谷中田美術様
- 菱三印刷 株式会社様
- 株式会社 和光様

表紙

- 右上 内閣総理大臣賞  
岸野圭作「微風」
- 左上 内閣総理大臣賞  
大谷喜男「マイ・ウェイ」
- 右下 文部科学大臣賞  
堤 直美「双笛譜」
- 中下 文部科学大臣賞  
村田好謙「生命の泉」
- 左下 文部科学大臣賞  
伊藤一翔「杜甫詩」

左記の先生方が逝去されました。  
謹んで哀悼の意を表します。

- 檀崎 華祥先生(書・会員) 7・9・29
- 那須 勝哉先生(日本画・会員) 7・10・3
- 市原 義之先生(日本画・会員) 7・11・4
- 海野 濤山先生(書・会員) 7・11・9
- 辻畑 隆子先生(彫刻・会員) 7・11・25
- 樽本 樹邨先生(書・会員) 7・12・23
- 亀井 勝先生(工芸・会員) 8・1・21

編集後記

一九九〇年の東京都美術館での日展審査についての座談会特集を読み返してみました。入場者数は二三七、八六六名の時代で、日本画は応募者が七四六名あり、本年の二倍以上でした。それでも先生方の対談内容はなかなか厳しく、緊張感のあるものです。この時の大臣賞、会員賞、特選受賞者から現在理事になっておられる先生方も沢山おられます。三五年前の日展ニュースは今読んでも共通するような内容も多く、示唆に富んだ内容でした。ただ時代の様相がかなり変化しております。一度、過去の座談会特集など連載企画してみたいと思いましたが、毎年の座談会で話されたことが少しずつ反映され現在へと繋がっているとありますが、まず出品者にできることは作品制作においては慣れに逃げず、一人ひとりが「注目の一点」を創り上げる気概で臨むことかと思えました。

(西田)

編集委員

- 亀山 祐介 西田 真人
- 浅見 文紀 松野 行
- 野原 昌代 堀内 秀雄
- 上原 利丸 古瀬 政弘
- 歳森 芳樹 山本 大悦